

イエイツとケルト文化復興

日 下 隆 平*

はじめに

近年、ポストコロニアル批評の観点から植民地における文学の意義が再検証されているが、その中でもアイルランド・ナショナリズムと呼応して起きたケルト文化復興は再検討に相応しいテーマであろう。これらについては、シェイマス・ディーンによる『ケルト復興』、エドワード・サイードの『文化と帝国主義』をはじめ、グレゴリー・キャッシュルによる『モダニズムとケルト復興』など優れた論文がある。またイギリス側のアイデンティティを論じたものとして、マリー・ピトックの『ケルト像とイギリス人像』¹⁾などがある。これらの中で、ディーンはケルト文化復興の旗手として活躍したウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats 1865-1939) について、彼の詩を前期と後期に区分する特徴を次のように説明している。「イエイツは自分の想像力に従ってアイルランドを創造することから出発した。しかし晩年にはアイルランドが想像力になじまぬことに気づいた。初期には、彼がアイルランドの現実を容易に受け入れることにより、アイルランドは微妙な象徴大系に実体を与えることができた。しかし後期になると現実が象徴を圧倒し、彼の感情が形式から解放されるときは、詩は破壊力を持った。感情を故意に抑制しようとするときは、詩は幾何学的 (抽象的) なものになった」²⁾。「彫像」はこの緊張関係をよく示している。この詩ほどオカルトの世界観と現実のアイルランドとの間に調和を強く求めたものはないといわれる。彼の前期の作品におけるケルト的題材は

イギリスにもアイルランドにも不都合がなく、彼にジレンマを感じさせるものではなかった。しかし高まる民族運動をテーマにしたものになると、イエイツの作品の中には矛盾が見い出される。これは、彼の政治的スタンスの曖昧さ、つまりアングロ・アイリッシュという帰属性の曖昧さが原因となって生まれたものといえる。「復活祭1916年」(第3連)などの詩は、これらの矛盾するものを調停しようとする意志が形而上学的特徴を生み出す結果となり、これが彼の詩を難解なものにしている。しばしば指摘されることであるが、イエイツの作品の特徴にはふたつの対立する力によるダイナミズムがある。これについてサイードはディーンの言葉を引用しながら、脱植民地詩人としてのイエイツが抱えた根源的矛盾と関連させて、それが詩の力の源泉となり後期の詩にみるような特徴が生み出される結果となったことを説明している。これは、とりもなおさず、イエイツが彼の内部においてアイルランド・ナショナリズムとイギリスの文化遺産をどのようにして折り合いをつけるかという問題でもあった。この論文は、帝国主義と植民地という関係からケルト復興に焦点を当てながら、『神秘の薔薇』など、イエイツのケルト的テーマをもつ作品について論じてゆくものである。

1) Murray G. H. Pittock, *Celtic Identity and the British Image* (Manchester: Manchester U. P., 1999), pp. 20-61.

2) Seamus Deane, *Celtic Revivals: Essays on Modern Irish Literature-Joyce, Yeats, O'Casey, Kinsella, Montague, Friel, Mahon, Heaney, Beckett, Synge* (London: Faber and Faber, 1985), p. 38.

1 ケルト文化復興の前提

ケルト文化復興は18世紀後半から末までの第1期と、19世紀後半から世紀末にかけての第2期のふたつに分けられる。19世紀後半のケルト意識の芽生えについて、拙論「アーノルドとアイルランド文化復興：ヤフーとアイリーン」³⁾の中で論考した。その中で特に注目したのはイギリスでのアイルランド人像の変化である。この論文では、この問題をさらに個別化して、アングロ・アイリッシュの詩人イェイツの立場から再度検討してゆきたい。

19世紀末イギリスにおける芸術運動の中で、ケルト文化復興は文学、美術の世界だけの現象でなく、社会政治的側面と不可分のものといえる。前述の論文のサブタイトルで用いたヤフー (Yahoo) とは、スウィフトが18世紀に『ガリヴァー旅行記』で描いた空想上の民族であり、アイリーンとは世紀末の挿絵でさかんに描かれた女性の呼称である。両者は正反対の特徴をもつが、どちらもアイルランド人像を表現している、異なる時代のステロタイプと見なすことができる。野卑、不潔、嫌悪の代名詞とも言えるヤフー、それに対して、愁いを漂わせた美女アイリーン、同じアイルランド人像でありながら、この両者にある落差は何を示しているのだろうか。この問題は、まさしく「ケルト文化復興」の本質と深い関連があるように思われる。アイルランド人を蛮族と見なす記事はしばしば他にも存在する。たとえば、『パンチ』誌には、ロンドンやリヴァプールに住むアイルランド人について、「わけの分からぬ言葉」をしゃべり、「煉瓦箱を担いで梯子を登る」アイルランド人を「アイリッシュ・ヤフー」と呼び、「アイリッシュ・サヴェジ」の同義語として用いられた。以下原文のまま引用する。

It comes from Ireland, whence it has contrived to migrate; it belongs in fact to a tribe of Irish

3) 「アーノルドとケルト文化復興：ヤフーとアイリーン」、『英米評論17号』（桃山学院大学総合研究所, 2002）, 3-28頁。

savages: the lowest species of the Irish Yahoo. When conversing with its kind it talks a sort of gibberish. It is, moreover, a climbing animal, and may sometimes be seen ascending a ladder laden with a hod of bricks.

The Irish Yahoo generally confines itself within the limits of its own colony, except when it goes out of them to get its living. Sometimes, however, it sallies forth in states of excitement, and attacks civilised human beings that have provoked its fury.⁴⁾ (下線部筆者)

ヤフーからアイリーンへの表象の移行過程には、アイルランドで高まったナショナリズムを背景に、イギリス帝国主義のひとつの帰結として生まれたオリエンタリズムが結びついたものと言えよう。これについては、ピトックが詳細に論じているように、おおざっぱに言ってイギリスにとってケルトの歴史的表象は、<他者としてのケルト像>から<自己補完的ケルト像>へと移行していった。世紀末にイギリスはアイデンティティの中にケルティック・フリンジを含めることでその自画像を修正した結果、ケルト像は自己補完的なものに変化した、とピトックは述べている。

ディーンは同じ文脈において、ルナン、アーノルド、ハヴィロック・エリス⁵⁾、ジョージ・バーナード・ショーなどの場合にみられるように、植民地と非植民地の間での交換の条件が変わり、「イギリスの国民性には不完全な部分があって、国民性を補い、それを生き延びさせるためには、アイルランド人がケルト人の性格を必要とすること」⁶⁾が突如として明らかになった、と指摘している。ディーンに従うと、アイルラ

4) L. P. Curtis, *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature* (Newton Abbott: David & Charles, 1971), p. 100.

5) (Henry) Havelock Ellis (1859-1939): 英国の心理学者・性科学者・著述家

6) Terry Eagleton, Fredric Jameson, Edward W. Said, *Nationalism, Colonialism, and Literature* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1990), p. 12.

ンド人はケルト人をゲール人と交換可能な用語にすることで、ケルト文化復興として知られる自らについての新解釈を始めたのであって、「アイルランド人が補足という思想を根本的差異の思想にまで拡大することができたのは、イギリス人が自らの国民性にとって必要な補助としてケルト人を見た時においてのみであった」⁷⁾。こうした表現は、サイドの帝国主義と反帝国主義は複雑に絡み合っているという言葉にも置き換えて考えることができよう。こうして、19世紀末のケルト民族再評価はイギリス帝国主義の帰結として起きたのであり、アーノルドは当時のイギリス人の心を癒す存在として、「ケルト民族」を利用した。つまり、ケルトをイギリスのアイデンティティに重ねることで、その補完的要素を取り込もうとしたのであり、その時流にうまく乗じたのがアイルランド文芸復興であった。初期のイェイツは、想像力に従って創造した架空のアイルランドから題材を得たが、後期になると彼のアイルランド像は現実と一致しなくなった、という前述のディーンの指摘は、アングロ・アイリッシュという彼の立場の難しさをよく示している。この架空のアイルランド像から数多くのテーマが生まれるが、イェイツはそのひとつとして吟遊詩人やケルト神話を取り上げた。さらにケルト文化復興を生んだ背景には、「伝統への渴望」というアイルランド人特有の思考過程が働いている。一種の伝統回帰であるケルティック・リヴァイバルには、19世紀以降のアイルランドの政治的側面と同時にイギリス側の社会に内在する問題も関連している。そしてその運動に関わった者の多くが、アングロ・アイリッシュという周縁の立場にいたことも注意すべきであろう。

アイルランドには、他の民族国家に較べて、文化的継続性が乏しいことがしばしば指摘される。これは外国支配や国内の紛争によって過去の伝統が抑制されてきたためであった。しかし一方で、伝統は知られぬ場所で存続してきたとする思いは、文学作品において述べられてきた。

そもそも「伝統」という用語にはふたつの重要な暗示的意味がある。

OED (第2版)によると、「伝統」(tradition)には「受け渡すこと」(continuity), また他方では「明け渡すこと」(surrender) 或いは「裏切ること」(betrayal) という両義性がある。法律や教会の歴史はこの正反対の意味を正しく認識し、その意味を汲み取りそれを習慣に反映してきた。ナショナリズムが高まるときには、文学は継続性を重視し、継続のプロセスを神聖化するあまり、ときには不可思議に思える思考様式をノスタルジックに表現してきた。これは、外国の侵略によって、文化の継続性がなかったアイルランドの場合にとくに当てはまる。たとえば、ダニエル・コーカリ (Daniel Corkery 1878-1964) が『隠れたアイルランド』(*The Hidden Ireland* 1924) の中で18世紀マンスターにおける吟遊詩人の、社会における役割について述べたことなどは、よい例と言える。

19世紀のイギリス人は、アイルランドの不和と無秩序に較べて、自らの国の安定と調和を確認することで、継続性と団結心を実感できた。それに対して、アイルランドでは、外国に侵略される以前の伝統文化がいつの時代か存在していたという想念が人々の間に生まれ、やがてそれは確信に変わると、それは現実の過去の記憶に取って代わるものとなった。同じように、アイルランドが独立国家でなかったがために、政治的独立への願望が強くなるにつれて、それは信念にまでなった。その結果、空想上のケルティック楽園 (ケルティック・エデン) と実現不可能なユートピア (政治的独立) という二極間で、不可思議な調和をめざす弁証法的思考が生まれ、それはアイルランド文化復興前後における人々の思想を支配するものとなった。「伝統」が存続しないと仮定するならば、新たに生み出す必要がある。また「不連続」「断絶」の状態であれば、崩壊したものの上に、それは再構築されなければならない。アイルランドにおける「伝統」という不確かな仮説は根拠がないものであったが、人々の「伝統への渴望」がその仮説を現実化させた。この点に、アイルランド文化復

7) *Ibid.*, p. 13.

興の原点があったといえる。

さて、アーノルドに戻る。ジョン・モーリー (John Morley) などイギリス・ヴィクトリア朝期のリベラリストがバークに影響されたところが多々あったように、アーノルドの場合も、彼のアイルランド観はエドマンド・バーク (Edmund Burke 1729-97) の影響を受けたといわれる。思想家としてのバークは、ダブリン生まれということもあり、アイルランド問題には格別に強い関心を抱いていたといわれる。彼の死後出版された「アイルランドの教皇法に関する小論」などのバークの思想とグラッドストーン (W. E. Gladstone 1809-98) とを関連づけて、アーノルドは経済活動に夢中で自己満足的なイギリス中流階級が、活気に満ち、陽気で想像力豊かなアイルランド人を規則づくめに縛ることは事実上できない、と述べた。バークと同じく両島 (ブリテン島とアイルランド島) の分離を避けなければならないとしながらも、そのために、彼はアイルランドの人々を味方に引き入れるようなイギリス中産階級側の変化を求めている。また、ふたりはプロテスタント優位体制にも異議を唱えている。グラッドストーンは1867年ウィガン (Wigan) 演説で、プロテスタント優位体制をそびえ立つ樹木に喩え、「その木陰のせいであたりの土地を痩せこけさせるほど、空高くまで育った、有害きわまりない」もの、と述べている。バークは、アイルランドのカトリック教徒はアイルランドの安定と繁栄がある限り、政治的にも市民生活においても認められなければならない、と主張していた。プロテスタント優位体制は真の貴族政治によって根絶やしにされ、それと置き換えられなければならないとも述べた。

19世紀イギリス・リベラリズムのアイルランド政策に関する支配的風潮を簡単に述べると、以下のようなものであったと言われる。それは、イギリス側の罪と責任の受容、アセンダンシーと言われるプロテスタント優位体制の終焉、イギリス帝国の中に継続してアイルランドを置き続けること、カトリック教徒の救済、などであった。これらの思想の多くはバークに負うところ

が多かった。アーノルドは、思想上バークの恩恵を受けていると度々語っている。彼は1881年に『エドモンド・バークのアイルランド論』 (*Edmund Burke on Irish Affairs*) というアンソロジーを編んだ。その序文で、バークは「私たちの政治思想家の中で傑出した人物である。彼の政治思想と著作にはいくつかの主題が扱われているが、アイルランドについてのものが最も意義がある。作品中、彼はイギリスによる圧政の例として、土地没収と再交付、イギリス軍の駐留、プロテスタント優位体制さらにイギリス政府がそれに依存していることなどを挙げ、アイルランドを現在の状態にした原因をはっきり示している。……彼はこれらを改善しようと努力を重ねた」と述べている。アーノルドは、一世紀前のバークのように、政府の政策さえ妥当であればアイルランド側の自治の要求を抑えることができると考えた。そうでないなら、アイルランド政策が成功しないのは、その差異にこそ原因がある、ということになる。文学にみるケルト的要素に注目し、ここから差異論を展開し、「実利」のみを重んじるイギリス中産階級よる支配から、イギリスが脱却できることを望んだといえる。そして結果的に、ケルトの美点はイギリス中産階級の欠点に相対応するものとみなした。つまり、ケルティック・アイルランドはイギリス中産階級を補完する要素を備えている、と彼は考えた。ここで注意すべきは、彼が当時の帝国主義的な立場から、アイルランドにケルト民族の概念を持ち込みイギリスとの差異を見いだそうとしたことである。

次にアイルランドをケルティック・エデンとみなす思想家イエイツにとって、バークはいかなる存在だったのだろうか。イエイツとアーノルドとの関連を検討する上で、些かなりとも述べておく必要がある。イエイツがバークを熱心に読んだのはかなり後になってからである。彼はオックスフォードにいた頃から1920年代にかけてバークを読み、全集を購入している。トーチアーナの指摘によれば、彼は上院議員を務めている間、バークを模範とすべき先輩政治家として、多くの部分にアンダーラインを引くほ

ど熱心に読みふけた。以下に引用する日記はそれをよく示している。

……私は何ヶ月も続けてスウィフトを読んでいる。スウィフトほどでないにせよ、バークやバークレーにも常に刺激を受けている。そしてゴールド・スミスにも魅せられこのあと読むつもりでいる。私は自分の思想と作品のために、新国家への帰属意識を得ようと資料を集めている。闇と混乱から抜け出たアイルランドの一世紀に、現代精神の国家像、しかも永遠の国家像を見出すことはできないだろうか⁸⁾。

この日記を書いた1920年代の頃、イェイツは彼自身の信条と国家を同一化しようと新生アイルランド自由国の国家理念を求めて、さまざまな書物を読んでいる。そしてそのほとんどは18世紀のアングロ・アイリッシュのプロテスタント教徒の系譜にある思想家によるものであった。バークもその中の一人であり、ここで述べているように、イェイツは彼らを読んだ結果、18世紀を「暗黒と混乱から抜け出た世紀」とみなしている。トーチアーナは、アイルランド自由国建設と同時に、イェイツがその秩序と伝統の拠り所を18世紀のアイルランドに求めたと説明している。彼はその時代を最もアイルランドでバランスのとれた時代と考え、「私たちはバークの民族である。私たちはグラタンの民族である。私たちはスウィフトの民族である。私たちはエメットの民族である。私たちはパーネルの民族である。私たちはこの国のほとんどの近代文学を生み出してきた。私たちは政治的英知の中で最善のものを生み出してきた」⁹⁾と、有名な上院での議会演説においてアングロ・アイリッシュの文化的優越性をあげ、自らがその伝統に属することを誇らしく述べている。だがその一方で、独立によって立場が逆になることへの危惧も強

く抱いているのがわかる。

今日立場は逆だが状況は同じである。……

[中略] ……多くのカトリック教徒を容認したイギリス系アイルランド人は何度もためらったあげく、自由国を承認した。彼らが防御のため武器を取ることはあるまい。敬虔なカトリックと熱烈なゲール精神が、18世紀末偏狭極まりないプロテスタントが犯したものと同一誤りを(カトリック教徒が)繰り返すことはないだろうか¹⁰⁾。

バークがフランス革命に対して保守的な立場をとったように、イェイツもアセンダンシーの優れた貴族文化が失われていくことに危惧の念を抱いている。その一方で、彼はこのアセンダンシーによる文化とカトリックが中心の農民文化をどこかで調停する必要があった。後述するが、その意味で彼のケルトに関する題材の多くは政治的レベルで解決できない問題を神話のレベルで調停しようとする行為に繋がった。

2 アーノルドのケルト

前節ではケルト復興の前提としてアーノルドにも触れたが、ここではもう少し詳しく『ケルト文学の研究』について述べておきたい。アーノルドがこれを上梓したのは1867年のことであった。これは、1865年から1866年までのオックスフォード大学での講義を『コーンヒル・マガジン』(Cornhill Magazine)に掲載し、単行本として刊行したものだった。彼の著作はイングランドにおけるケルト像の変化に寄与するところが多大であった。彼は、ヴィクトリア朝の中流階級にはフィリスティニズム(Philistinism)、つまり無教養(実利主義)が蔓延しているとし、それを補完・修正する要素として、ケルト民族にその任を与えた。その序文の一部を要約すると、「イングランドの私たちは、ある局面に到達した。それは、我が国の進歩や偉大さがある原因で脅かされている時期のことである。無気

8) W. B. Yeats, *Explorations* (London: Macmillan, 1962), p. 344.

9) Donald R. (ed.), Pearse, *The Senate Speeches of W. B. Yeats* (London: Faber and Faber, 1960), p. 99.

10) W. B. Yeats, *Explorations*, p. 338.

力な貴族の時代が終焉に近づこうとしているからでもなければ、俗っぽい下層階級の時代が始まろうとするからでもない。それ以上に、中流階級のフィリスティニズムに危うくされているのである。俗悪な美が好まれ、モラルの面では品性のなさが、精神面では知性の欠如が目立つ。これがフィリスティニズムなのである。この時代にこそ、ケルトの人々の繊細な感性や精神性が求められる時期なのであり、私たちは彼らと混じり合わねばならない¹¹⁾と述べている。アーノルドは、1850年代初期からケルトに関連する詩を書いた。その中でも、「聖ブランデン」、「トリスタムとイズー」という詩の中では、ケルトの精神性、女性的要素が述べられている。ルナンと同じように、アーノルドは、「ケルト民族は政治において無能であったように、物質文明においても無力であった¹²⁾とも述べている。すなわち、「ケルト民族」が重んじたのは内的世界であり、物質的な外的世界ではなかった。別の言い方をすれば、アングロ・サクソンの体現する男性的要素・物質文明に対抗しようものとして、ケルト像は女性的要素・精神文明を意味するものとし、彼は「ケルト」を繊細かつ想像力豊かな民族とみなしている。これはルナンが「民族に性別を当てはめることが許されるならば、ケルト民族は本質的に女性的である¹³⁾、と述べた思想を継承するものであった。のちに、イェイツはルナンの著作を読みながら、その余白に「繊細」、「女性的種族」、「女性的理念」などのケルト族の特徴をコメントとして書き添えたといわれる。ルナンから継承した女性的な「ケルト」像について、アーノルドは次のように述べている。

……たしかに、ケルト民族の鋭い感性、すぐにも興奮しやすい性質には、どこか女性的

なところがある。そのせいか、ケルト民族は女性特有のものに魅せられる傾向がある。彼らは女性特有のものによく似た部分があり、その神秘と近いところにある。また、ケルト民族はその敏感さゆえに、自然とその生命に対してきわめて近い親密な感情をいだいている。この点でもケルト民族は、目の前の神秘に、自然美とその魔力の神秘にとくべつに魅了されて、その神秘と親密になり、それを半ば予感しているようである¹⁴⁾。

この点について、グレゴリー・キャスルーは次のように述べている。ルナンのテキストは植民地支配に、都合のよい文化的性差論（ジェンダー）を当てはめるものであり、アーノルドはさらにこれを発展させて、ケルト民族を「臆病で内気で繊細な民族」として描くことで、帝国主義がそれを父親として庇護する寓話に置き換えようとした¹⁵⁾。アーノルドは、アイルランド人に典型的な民族的特質、つまり活力、無秩序な面があるのを認めつつも、ケルト民族特有の特徴として「情緒的」（sentimental）な面があることを述べようとした。アーノルドの場合に「情緒的」という用語は多面性がある。それは、生き生きとした個性、鋭い感受性、社交性、理解力、雄弁さ、さらに開放的かつ冒険好きで陽気な性質を表すものであった。アーノルドはこれについて以下のように述べている。

もしケルト民族の性質を一語のみで特徴づけるとしたら、「情緒的」という用語が最良の表現である。感じやすく、しかもたいへん強烈に感じやすい民族、それゆえ、喜びにも悲しみにもきわめて敏感な生き生きとした性格、これが本質である。もし人生の不運が幸運よりもはるかに多いなら、あらゆる感情をあまりに敏感に、あまりにふかく意識するがゆえに、こうした気質はおそらく内気で傷ついていると見られるだろう。思いに沈み後悔して

11) Matthew Arnold, *The Study of Celtic Literature* (London: Kennikat Press, 1905), p. x.

12) *Ibid.*, p. 89.

13) William G. Hutchinson (tr.), *Poetry of the Celtic Races, and Other Studies by Ernest Renan* (London: Kennikat Press, 1896), p. 8.

14) *Ibid.*, p. 90-1.

15) Gregory Castle, *Modernism and Celtic Revival* (Cambridge: Cambridge U.P., 2001), p. 47.

いると見られるかもしれないし、激しく切ない憂鬱状態にあると見られるかもしれない。だが、この気質の本質は、生命や光や感情を熱烈に求めることなのである。つまり、屈託がなく大胆で陽気な性質なのである¹⁶⁾。

アーノルドはケルト的感性が英国人の性格には不可欠のものとなした。つまり、チュートン族の物質性、政治的な強さに「ケルト」の性質を重ねることで、女性的、情緒的民族という装飾を付与することができたといえる。アーノルドのケルト民族異質論は政治的意図がなかっただけに、多くの文化的影響を与えたといわれる。

ケルト対サクソンという象徴的構図は、19世紀社会では多数のカトリックがプロテスタント優位体制による弾圧を受けていた事実 にすり替わり、ケルト（カトリック教徒）対サクソン（プロテスタント）という構図にまで展開していった。ゲルマン民族・プロテスタントのイギリスには、ケルト的・カトリック・アイルランドの特徴を必要とすることを、彼は述べている。一例として、アーノルドは1878年にジョン・モーリーの『フォートナイトリ・レビュー』（*Fortnightly Review*）に「アイルランド・カトリックとイギリス・リベラリズム」というエッセイを発表している。中産階級は蒙昧であるがゆえに、その政策も暗愚きわまりない。彼らの考えや感情が影響を及ぼし政治家のアイルランド政策を左右しているところに、イギリスの抱える問題がある、とするのが彼の主な論点であった。アーノルドにとって容認できないのは、偏狭極まりないプロテスタント中流階級のカトリック・アイルランドへの態度であった。ケルト対チュートン、或いはカトリック対プロテスタントが互いに対立した。プロテスタントのイギリスと、ケルト・カトリックのアイルランドというアーノルドが用いた区分はイギリス系アイルランド人による人種・宗教の差別を解消し

ようとする試みとなった。

ケルト民族のロマン化は、アイルランド・カトリックのロマン主義的解釈につながったわけである。その結果、ケルト民族とカトリック教徒とが重なって、カトリック・ケルトという概念が生まれていった。前述したパークのプロテスタント優位体制批判は、アーノルドのイギリス中流階級批判とアイルランドに駐在するプロテスタント軍批判に組み込まれていった。

アーノルドが述べた、ケルトとイギリスの融合は、ある意味では男性と女性の関係に喩えられるとハウ（Marjorie Howes）は指摘する。彼は「劣るが女性的で魅力的なケルトの族長と、優れた男性的なサクソンの族長との幸福な結婚」とみなした上で、ケルト民族はこの結婚によって、「イギリス帝国という館の天使」（‘the angel in the British house of empire’）という役割を果たし、その館の中を甘美に充足させる存在となっていると述べている。因みに、アシス・ナンディによれば、ジェンダーによって植民地支配を捉えるようになったのは1830年代の頃でイギリス中流階級が社会の支配層になってからのことであり、それ以前にはみられなかった¹⁷⁾。アーノルドは、ケルト民族が「物質文明においても、政治面においても非力」という特徴を述べたあと、彼らが「生来、規律を嫌い、無秩序で、騒々しい。しかし親愛の情と賛美の気持ちから、ある指導者に身も心も捧げることがある。これは政治的気質として有望なものではなく、ある程度まで訓練可能で素直なアングロ・サクソンとは正反対」¹⁸⁾の気質であるとも述べている。このようにイギリスの内なるケルトとしてその価値を認めるものの、ケルティック・フリンジを現実面での能力として評価していないのがアーノルドの論といえよう。

前世紀末にイギリスはケルト像を自己補完的要素とすることで、その自画像を修正した、と冒頭で述べたが、『ケルト文学の研究』はイギ

16) Matthew Arnold, *The Study of Celtic Literature* (London: Kennikat Press, 1905), p. 84.

17) Ashis Nandy, *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism* (Oxford: Oxford U. P., 1983), p. 4.

18) Arnold, *op. cit.*, p. 91.

リス帝国主義を支持する立場から述べられたもので、アーノルドはイギリス社会への警鐘からケルト的要素を讃えたといえよう。

3 イェイツとアーノルド

アーノルドは帝国主義を構成するメンバーの一員としてのケルト民族を認め、ケルト民族をイギリス帝国主義に相応しい文化的役割を担わせようとした。さらにイギリス帝国とその言語に対し文化的な忠誠を誓わせることで、アイルランド人の活力を吸収しようとした節がある。もう一つの面として、「無規律、無秩序、乱暴」という19世紀のアイルランド人のステロタイプが、自然愛好心や豊かな想像力に変化した。エドワーズが言うように、アーノルドは1890年代のケルト福音主義者——ワイルド、ショー、アレン、マクロード、イェイツ——に基盤となるものを提供した¹⁹⁾。イェイツは、1890年代を通じて多くの論文、記事、書簡で当時のアイルランド人像に反発している。その中で注目すべきはアーノルドの『ケルト文学の研究』に関する言及である。彼の反応はケルト民族の想像力やイギリス文学に果たした役割について表面的には正鵠を射たものとしているが、そうでない部分もあることを述べている。

アイルランドのことを書く者がみなアーノルドの見解にもとづいて議論立てをしているなどとは思わないが、ここでしばらく彼の見解を考察し、どの点が有益で、どの点が有害であるかをみておくことは無駄ではあるまい。さもないと、いつの日か私たちは気違いのようにみなされ、敵が私たちのバラ園を掘り返して、そこにキャベツ畑を作ることにもなりかねない。ルナンやアーノルドの論を簡単にでも再述しておく必要がある。(鈴木弘訳「文学におけるケルト的要素」)

上記の引用文は、ケルト民族異質論を述べるアーノルドに対してイェイツが彼の主張の「どの点が有益で、どの点が有害」なのかを精査しようとするものである。さらにイェイツは、次のように反論をしている。その能力はケルト民族に限ったことでなく古代信仰を持った民族に共通する特徴である。そして、「自然の魔力」が「世界の古代宗教、すなわち古代の自然崇拜のことであり、自然を前にしての心騒ぐ忘我の境、忘我によって必ずや美しき光景が眼前にちらつき、それが人の心に染み入る情態にすぎない」いうことをアーノルドは理解していなかった、と述べた。芸術はつねに古代の情熱や信念にみなぎっていなければならないことを、イェイツは次のように逆説的に表現している。

マシユウ・アーノルドは語った。もし「イングランドがどこから憂うつな風趣を得、自然呪法をとり入れたか」と尋ねられたら、「私は自信をもって、その憂うつな大部分はケルトからのものであると答え、また、確信をもって、その自然呪法の大半はケルトを源にして発していると答えるであろう」と。私はこれを別の言いあらわし方をして、文学はつねに古代の情熱や信念にみなぎっていなければ、たんなる、事実の記録、または情熱の伴わない空想、情熱の伴わない瞑想になりさがるであろうと言いたい。(鈴木弘訳 同上)

ここである疑問が生まれてくる。イェイツは、ケルト民族がイギリス帝国へ服従することに対して、結果的に異議を唱えたのだろうか。また、未開の地とする差別的な議論に抗弁できたのだろうか。結局のところ、彼の場合も、アーノルドの議論を再解釈して、ケルト民族の神秘化を避けられなかったのではないのだろうか。これについてディ克蘭・キバード (Declan Kiberd) の指摘は興味深い。イェイツはアーノルドの理論を書き換え、それを「カトリック的な想像力とプロテスタントのもつ有能さの結合」(“of uniting Catholic imagination with Protestant efficiency”) という父から受け継いだ思想に作

19) Owen Dudley Edwards, “Matthew Arnold’s Flight for Ireland,” in Robert Giddings (ed.), *Matthew Arnold: Between Two Worlds* (London: Vision and Barnes & Noble Books, 1986), p. 151.

り替えた。キバードによると、イェイツにとって単一政府のアイランドを生み出すことは、まず自己内部の相反する性質を政治的レベルにおいて融合させる試みであった。

アーノルドのケルト民族論はまた、イェイツの農民と民間伝承に関する思索を進める上でも、重要であった。イェイツがアイランド農民の理想化された姿を描くときには、彼は植民地思想を容認していたように思える。彼の描く農民は実際の素朴な住民とかけ離れ異なった存在となっている。彼自身、後年「漁夫」の中で、1890年代に描いた農民を、「空想の中にしか存在しない男」と述べている。また、リチャード・ロフトス (Richard Loftus) が指摘するように、イェイツは農民のマスクを用いて直感的に自分の信念を述べようとした。しかし、彼は田園によって素朴かつ高潔な性質を表現しようとするものの、そこに描かれた農民は実感の伴わぬものとなっている。いうならば、イェイツのアルカディアに住む農民は想像力の産物であった。ハーシュ (Edward Hirsch) の表現を借りると、農民は「文化的、田園的、非物質主義的なアイランドの生活を象徴」するものであった。イェイツの農民の描き方は、彼が復活しようとするアイランドと同じように空想的な存在といえた。

皮肉にも、この論理はアーノルドと同じであった。つまり、気高い農民を描き、詩人、貴族と同列に置こうとする彼の試みは、アーノルドがケルト民族の精神をイギリス国民に不可欠のものと考えたのと同じ論理であった。この点に、アーノルドのケルト民族論がイェイツの農民、大衆文化および民間伝承に関する思想の展開に果たした影響の跡をみることができる。

4

バーディク・アイランド 風刺と詩人

1888年から1900年初期にかけて、イェイツはアメリカの新聞『ボストン・パイロット』 (*Boston Pilot*) と『プロヴィデンス・ジャーナル』 (*Providence Sunday Journal*) に数多くのコ

ラムを寄稿しているが、これらの多くは彼自身のケルト意識の芽生えや文化的ナショナリズムを反映している。この中でとくに「ケルト」という、彼の用語にまず注目してみたい。ある書簡 (1891年4月18日『ボストン・パイロット』掲載) では、ロンドンから原稿を送る場合には、自らのコラムを「ロンドンのケルト」 ('Celt in London')²⁰⁾と名づけている。一方、アイランドにいるときは「アイランドのケルト」と自らを紹介している。コラムの原稿をアイランドの新国立図書館から送るに際して、「あなた方のケルトは多くの書簡を敵の首都から書いてきました。しかし、いまは自分の民族とともにいます。いまはもう『ロンドンのケルト』ではなく、『アイランドのケルト』です」と自らを表現している。

イェイツは1880年代後半からアイランドの民衆に伝承される物語を書物にまとめ始めた。『アイランド農民の妖精物語と民話集』 (1888)、『ケルト妖精物語』 (1892) では、クローカー、ラヴァー、ハイドなどの採取家による物語を編纂した。これらにはアイランドの農民に伝承される幻想的要素がよく窺われる。さらに1897年にはイェイツによる架空の吟遊詩人を扱った『レッド・ハンラハンの物語』 (*Stories of Red Hanrahan*) と『神秘の薔薇』 (*The Secret Rose*) が出版された。これら散文は一連のケルト民族の伝統を追求するものであるが、そのあとに刊行された『ケルトの薄明』は単なる民話採集でもなければ、創作ともいえない。現地調査と語り手の随想を組み合わせたものである。両者の仲介は、今にも消滅しようとする固有の伝承文化を、イェイツがもう一度蘇らせる創造的な行為としてみなされた。それらは、作者のフィルターを通されることから、「奇妙な物語とエッセイの混合、フォークローの正確な記録と空想的な作家の虚構の回想」などと批評された。イェイツは自分の手によるテクストの信頼性が高いことを述べると同時に、

20) W. B. Yeats, *Letters to the New Island* (Oxford: Oxford U.P., 1934), p. 45.

民話採集者としての自らの役割をつよく認識している。『ケルト妖精物語』の序文においても次のように述べて、クローカーなど、彼以前のアングロ・アイリッシュの民話採集者によって滑稽きわまりないアイルランド人の類型が創られたと述べ、彼らの功罪を語っている。

アイルランドの上流階級独特の無責任な思想をもっていたクローカーとラヴァーは、あらゆることを面白おかしく眺めた。彼らの時代の、アイルランドの文学を動かす力は大眾をまじめに扱うこともなく、自分の国をユーモア作家のアルカディアだと空想するような階層の中から生まれてきた。主にそれは政治的な理由のためであった。大眾の情熱、その憂鬱、その悲劇について、彼らは何も知らなかったのだ。とはいうものの、彼らの仕事が全部偽りだったというのではない。彼らは船頭や御者や郷士の召使いたちに最も頻繁に見られるあのいいかげんな類型を、国民全体の類型にまで拡大し、そうして芝居に登場するようなアイルランド人を創作したのである²¹⁾。

『神秘の薔薇』の巻頭を飾る同名の詩は、時を超越したものを結びつける力をみごとに示している。薔薇はいうまでもなく、ダンテが神や愛の象徴として用いられてきたものである。1890年代のイエイツにとって、「文化の統一性」は重要な問題であった。それはアセンダンシーと農民に代表されるカトリックの文化の統一でもあった。ここでは薔薇は時を越えて、コノハー王など多くの神話上の人物から、キリスト教の歴史、キリスト教による追放者たちを包括している。『神秘の薔薇』で描かれた吟遊詩人の霊的能力は、文化復興期の作家と農民とを結びつける「普遍的な精神」を象徴するものであった。

Far-off, most secret, and inviolate Rose,
Enfold me in my hour of hours;
.....

21) W. B. Yeats (ed.), *Fairy and Folk Tales of Ireland*, (London: Colin Smythe, 1973), p. 6-7.

And the proud dreaming king who flung the crown

And sorrow away, and calling bard and clown
Dwelt among wine-stained wanderers in deep woods;

.....

I, too, await

The hour of thy great wind of love and hate.
When shall the stars be blown about the sky,
Like the sparks blown out of a smithy, and die?
Surely thine hour has come, thy great wind blows,

Far-off, most secret, and inviolate Rose?²²⁾

大風 (great wind) とは、「終末」を暗示するとの指摘があるが、ここには後になって歴史のメタファーとして発展する「ガイアー」の萌芽が感じられる。また、「時の十字架にかけられた薔薇に」(“To the Rose of upon the Rood of Time”)では、薔薇はすべてを包括する民族の精神的財産の表象であった。この「神秘の薔薇」においても、薔薇はアイルランドそのものを象徴するものとなっている。イエイツは、現実のアイルランドとイギリスの問題、民族問題などから意識的に離れると、自ら創作した神話の中でケルトの霊的かつ魔術的な世界と、イギリス帝国の物質的かつ歴史的世界との間を仲介する役割を果たそうとしている。民族のスポークス

22) 遙かなる、密やかな、聖なる薔薇よ、
わたしを包み給え、わが千載一遇の時に、
.....

王冠と悲しみを振り捨て
吟遊詩人と道化を呼び、
酒にひたる放浪者の中に入り深き森に住んだ
あの夢みる誇り高き王
.....

わたしもまた待とう あなたの愛憎の大風が吹く時を

星が、鍛冶屋で飛び散る火花のように、
星くずとなって空に消え果てるのは、いつのことだろう

必ずや、あなたの時がきて 大風が吹くのだろうか

遙かなる 密やかな 聖なる薔薇よ (鈴木弘訳、一部変更のうえ使用)

マンとして詩人の任務を自覚するのは、他の植民地における詩人エメ・セゼールなどとも共通する感覚といえよう。

イェイツはケルト的題材に基づくものとして、これらの民話や神話のほかに、吟遊詩人のテーマを好んで取り上げ、それらはこの時期の成功した作品となった。吟遊詩人については、『レッド・ハンラハンの物語』と『神秘の薔薇』に収集された「流れ者のはりつけ」(‘The Crucifixion of the Outcast’) の中で取り上げている。「流れ者のはりつけ」は中世のロマンスに基づいたもので、放浪の吟遊詩人クールに関する物語である。クールが一夜の宿を修道院に求めることで始まる。クールは異教のドルイド教を信じ、教会がとうてい容認できない超自然的な能力を持っていたため、修道院長たちは言葉の魔力をもてあそぶ彼を改宗させようとしたが、彼は聞く耳を持たぬばかりか韻文を作って脅かそうとする。最後に、司祭たちは吟遊詩人を怖れて、十字架にはりつけにするという内容である。ここで彼はケルトの世界とキリスト教世界を対峙させて、それらの接触、交流、抗争を扱っている。だが、その物語の内容以上に注目されるのは、イェイツの吟遊詩人への強い関心である。彼はスタンディッシュ・オグレーディの『アイルランドの歴史』からアイルランド吟遊詩人の伝統を知った。

アイルランドの伝説によれば古代ゲール社会にはフィリー (*Filid*) と呼ばれる詩人がいて、彼らは詩作だけでなく予言的能力をも備えていたといわれる。彼らの任務は部族の記録を詩によって保存することや頌歌 (panegyric) によって族長を誉め称えることでもあった。こうしたフィリーの能力の一端が描かれているのが、11世紀のアイルランドの伝承物語に基づいて書かれた「流れ者のはりつけ」である。この中で古代の吟遊詩人が持っていた能力の中で最も怖れられていたものは、詩人の持つ呪術的能力であった。作中、次の引用文には吟遊詩人の風刺の力を民衆だけでなく修道院の僧でさえ怖れたことを述べている。

‘...And now he is singing a bard’s curse upon you, O brother abbot, and upon your father and your mother, and your grandfather and your grandmother, and upon all your relations.’

‘Is he cursing in rhyme?’

‘He is cursing in rhyme, and with two assonances in every line of his curse.’²³⁾

また別の部分では、韻を踏む詩が修道院長をも怖れさせたことを述べている。

‘Neither our Blessed Patron nor the sun and moon would avail at all,’ said the abbot; ‘for tomorrow or the next day the mood to curse would come upon him, or a pride in those rhymes would move him, and he would teach his lines to the children, and the girls, and the robbers. Or else he would tell another of his craft how he fared in the guest-house, and he in his turn would begin to curse, and my name would wither....’²⁴⁾

『スコッツ・オブザバー』(*Scots Observer* 1890) 誌上において、イェイツは「吟遊詩人のアイルランド」(‘Bardic Ireland’) を発表して

23) W. B. Yeats, *Mythologies* (London: Macmillan, 1959), p. 150.

「そして今は、院長様のことを呪う吟遊詩人の歌を歌っております。おお院長様、それにあなた様のお父様、お母様、お祖父様、お祖母様、お身内の方々みなを呪う歌を歌っております。」

「そ奴の呪いの歌は、ちゃんと韻を踏んだ詩になっているのか。」

「そうでございます。その歌の一行毎に諧韻が二つずつございます。」

(井村君江・大久保直幹訳『神秘の薔薇』)

24) *Ibid.*, p. 151. 「有難い守護聖人も太陽や月も何の効き目もないだろう」と修道院長は言った、「明日になれば、あるいは明後日になれば、また呪いの歌を歌いたい気分になるだろう。あの詩を自慢したくなるだろう。そして子供や娘や盗賊に自分の作った詩を教えるだろう。あるいは、自分と同じ吟遊詩人に、宿坊でどんな扱いを受けたかを語るだろう。そしてまた呪いの歌を歌い出すだろう。わしの名はすたれてしまう。……」(井村君江・大久保直幹訳『神秘の薔薇』)

いる。それを簡単に要約すると、吟遊詩人はゲール社会で最も強い影響力をもつ存在であった。さまざまな迷信から彼らへの尊敬の念が生まれていった。彼らが何を要求しても、人々は拒むことはできなかったという。ある王の場合、民衆を拐かしたという罪状で吟遊詩人に眼を差し出すように求められたため、彼はやむを得ず眼を削り貫いて吟遊詩人に差し出したという。彼らの支配は怖れられもしたが、また好まれもした。ゲール社会で詩と呪術はほとんど紙一重の差であって、ときには風刺の力によって国中が飢饉に見舞われるとさえ信じられた。同じような感情は今なお残り、ある土地では人々が意地悪な詩人による「韻文」をひどく怖がるという現象がある。吟遊詩人が有した能力は、ゲール社会において一つの興味深い現象になっている²⁵⁾。以上がイエイツの論旨である。

エリオット (Robert C. Elliott) は『風刺の力』の中でフィリーの伝統について述べ、それはゲール社会から現代までも通じる要素があることを論じている。彼によれば、フィリーたちは排他的かつ自律的な社会を構成していた。その中で彼らは厳しい訓練を経てのち、詩人としての奥義を究めたといわれる。風刺と魔術には深い関係があると信じられ、彼らの用いる押韻による風刺は呪詛となり人々に怖れられた。この精神は今も生きつづけており、現代詩人の中にもゲール社会においてフィリーが有した呪術的能力を継承すると信じる者がいたとエリオットはみなしている。彼は「すべてのこうしたことは20世紀からは隔たったことのようにであり、私たちの風刺とその影響の概念からはかけ離れているように思える。だがその伝統は生き続けている²⁶⁾と述べている。その一例として、エリオットは20世紀の詩人であるヒュー・マクダミット (Hugh McDiamid) をその例にして、彼がこ

の伝統を継承する純然たるケルト詩人と自らをもって任じていたと述べている。

第一節で述べたように、ケルト文化復興を生んだ背景には、「伝統への渴望」というアイルランド人特有の思考過程が働いている。そして、「文化の統一性」を実現するために、フィリーという詩人の伝統を見いだそうとした復興期の作家達にも、その一例を窺うことが出来よう。最後になるが、R. F. フォスターによる次の言葉は、イエイツを民間伝承、妖精物語、そして吟遊詩人などのケルト世界に向かわせた理由の一端を示唆するものと思われる。

イエイツは(1890年代のAnglo・アイリッシュという)周縁的立場から作家として出発したため、彼は作品と生活の両面でアイルランド人としてのアイデンティティを確立せねばならなかった。そのプロセスで、彼は自身のため、自分の家系のため、自分の伝統のためにアイルランド像を修正していった。彼は、土地(とくにスライゴの地)への権利を主張することから始めた。彼は、その地の住民、フォークローと妖精物語の発見を通して主張を始めたが、問題がいくつかあった。その一つに、彼がプロテスタントの信仰を持つ神秘主義者であったので、宗教の面で彼にはアイルランドを理解出来ないという誇りを受ける可能性があった。しかし1890年代の神智学とオカルト研究に加えて、フォークローと民族学についての関心を抱いたことで、彼は国民の伝統を通してナショナリズムへの道を開くことができた²⁷⁾。

おわりに

この論文はアイルランドの文化的ナショナリズムの発露としての、ケルト復興に焦点をあてながら、前期のイエイツについて論じてきた。グラント・アレン (Grant Allen) は、1891年に『フォートナイトリー・レビュー』の中で「現

25) Robert Welch (ed.), *W. B. Yeats: Writings on Irish Folklore Legend and Myth* (London: Penguin Books, 1993), P. 51.

26) Robert C. Elliott, *The Power of Satire: Magic, Ritual, Art* (Princeton: Princeton U.P., 1966), p. 18-32.

27) R. F. Foster, "Protestant Magic: W. B. Yeats and Spell of Irish History," in *Paddy and Mr. Punch* (London: Penguin Books, 1993), p. 227.

代の主要な運動は……どれをとっても、そこに登場する数多くの名前を見るだけで、新しい改革論は本質的にケルト族の産物であるのが、すぐわかる²⁸⁾と述べている。確かに、ラファエル前派のモチーフ、ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスの螺旋模様、オックスフォード・ムーヴメントなど芸術から宗教に至るまで、ケルト意識は表れている。「ケルト文化復興の前提」では、19世紀末のブリテン島・アイルランド島の両島においてケルト意識が生まれた背景を述べた。「アーノルドのケルト」では、アーノルドの論文を中心にイギリス人を補完する要素として精神的かつ女性的要素を示すケルト像を、それぞれ検討した。また、「イェイツとアーノルド」では、アーノルドの影響を受けたイェイツが植民地思想に対して取った態度を論じた。アイルランド農民の理想化された姿を描くとき、アーノルドがケルト民族の精神をイギリス国民の補うものと考えたのと同じ論理であり、彼は植民地思想を容認していたといえる。彼の論理はアーノルドと同じであった。「バーディク・アイルランド：風刺と詩人」ではケルト復興の代表作の一つ『神秘の薔薇』の中から「流れ者のはりつけ」を中心に、フィリー・ポ

エトといわれる吟遊詩人のテーマを通じて、アイルランドという素材の作品化の過程を検討した。帝国主義と植民地という関係において、ケルト文化復興という芸術運動はイギリスとアイルランドでは目的とするところが異なったものの、双方に利するところがあったといえる。その点からすると、周縁に介在したアングロ・アイリッシュがこの運動の主たる担い手であったのは当然と言えるかもしれない。というのはイェイツのように、彼らはアセンダンシーの伝統と農民に代表されるカトリックの伝統とを調停し「文化の統一性」を実現することを念頭に置いていたからである。ケルト文化復興を生んだ背景には、植民地の中で喪失した「伝統への渴望」というアイルランド人特有の意志が働いている。そして、フィリーなどのケルトの伝統（正確にはゲールの伝統）を見いだそうとしたのは、失われた「文化の統一性」を実現するためであった。

本稿は、2001年度桃山学院大学特定個人研究費助成による研究題目：『W. B. イェイツの世紀末』の成果報告である。

28) ホルブルック・ジャクソン著、澤井勇訳『世紀末イングランドの芸術と思想』（東京：松柏社、1990）、179-80頁。

W. B. Yeats and the Celtic Revival

Ryuhei KUSAKA

In recent years, there has been a growing inclination to re-examine the nineteenth-century Celtic Revival in colonial England. The goal of this study is to discuss the meaning of Celtic Revival through the work of William Butler Yeats. He was a distinguished figure of this movement and a descendant of Anglo-Irish family. He felt the necessity to reconcile the Protestant Ascendancy and the Irish Catholic tradition in his mind.

Yeats wrote a famous essay in which he expressed his response to *On the Studies of Celtic Literature* by Matthew Arnold. Arnold's writing was important to Yeats because he mystified the Celtic character and introduced the Celtic idea as a differentiating fact between Ireland and England. Arnold attempted to bring about 'healing measure' by blending the delicacy and spirituality of the Celtic peoples with 'Philistinism' of British middle-class. The mystification of the Celt becomes, in effect, the romanticizing of the Irish Catholic in Revivalists. Yeats tried to discover an aristocratic element within the Protestant Ascendancy and to associate this with the spiritual aristocracy of the Catholic and Celtic peasantry in his mind.

In the first chapter, the Irish identity under colonialism will be examined. In the second chapter, Arnold's Celtic essay will be discussed. He admitted the femininity and the spirituality of Irish Celt into the British character. In the last chapter, I will examine Yeats's prose based on the Celtic material. He knew from O'Grady's writing that there was the bardic tradition in Ireland. The bard (in Irish *file* or *ollamh*) was 'highly trained in the use of a polished literary medium.' The monks and even the abbot in the monastery are afraid of a wandering poet's rhyme in 'The Crucifixion of the Outcast.' This is derived from the legend that people in the old Gaelic society were afraid of the satire of the *file* poet.

Finally, his attempt to ennoble the Irish peasantry, as represented in the Irish folklore and legend, can be accounted for by the same logic that Arnold admitted the Celtic sensibility into the national character. This is, at the same time, true of his Ireland he invented in Celtic Revival.